

看護師の自己愛傾向と共感性に関する検討

○神宮寺 陽子・岩永 誠
(広島大学大学院総合科学研究科)

問題と目的

自己愛傾向者は対人関係を築くことが難しく、共感性が欠如している(小塩, 1998)。看護職は、ヒューマンサービス業の典型であり、患者やその家族への共感性が求められる職業である(飯野, 1998)ため、看護師の共感性の欠如は、患者やその家族との信頼関係が築けなくなり、質の高い看護が難しくなると考えられる。本研究では、自己愛傾向が情動的共感性に及ぼす影響、及び対人恐怖心と自尊感情が情動的共感性に及ぼす影響を検討することを目的とする。仮説としては、自己愛傾向が高くなると情動的共感性が低くなると考え、自己愛傾向が高く対人恐怖心が高いとき、自己愛傾向が高く自尊感情が高いときは、情動的共感性を低めると考えた。

方法

対象者 総合病院に勤務する看護師 206 名(女性 195 名、男性 11 名)。年齢は、40 歳代が多い。

手続き 総合病院に依頼し、郵送法にて実施した。

質問紙の構成

1) 自己愛傾向: 自己愛的人格項目群(相澤, 2002) 48 項目, 1-5 の 5 件法。2) 共感性: 情動的共感性尺度(加藤ら, 1980) 24 項目, 1-7 の 7 件法。3) 対人恐怖心: 対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1997) 30 項目, 0-6 の 7 件法。自尊感情: 自尊感情尺度(山本・松井ら, 1982) 10 項目, 1-5 の 5 件法。

分析 各尺度の因子分析(最尤法、斜交回転)を行った。情動的共感性を目的変数、自己愛傾向と対人恐怖心、自尊感情を説明変数、対人恐怖心、自尊感情を調整変数として重回帰分析を行った。本研究では説明変数の交互作用成分に着目し、有意であった交互作用を図示し、回帰直線の傾きの検討を行った。

結果

因子分析 抽出された因子は以下の通りである。自己愛傾向は「過敏型自己愛」「誇大型自己愛」「自己

防衛的怒り」の 3 因子 ($\alpha s > .801$)。情動的共感性は「冷淡な反応」「共感的な反応」「被影響性」の 3 因子 ($\alpha s > .511$)。対人恐怖心は「集団参加への不適応」「無能力感」「評価懸念」「対面不安」「意志の弱さ」「引っ込み思案」の 6 因子 ($\alpha s > .823$)。自尊感情は「自尊心」の 1 因子 ($\alpha = .777$)。

情動的共感性、自己愛傾向と対人恐怖心との関係

「過敏型自己愛」と「意志の弱さ」の交互作用が有意 ($\beta = .172, p < .05$) で、「共感的な反応」に対して「過敏型自己愛」の関連が「意志の弱さ」高群 ($\beta = .303, p < .05$) は有意な関連を示したが、「意志の弱さ」低群 ($\beta = -.025, p > .80$) は有意ではなかった。

「過敏型自己愛」と「評価懸念」の交互作用が有意 ($\beta = .119, p < .05$) で、「被影響性」に対して「過敏型自己愛」の関連が「評価懸念」高群 ($\beta = .576, p = .00$) は有意な関連を示し、「評価懸念」低群 ($\beta = .363, p < .01$) よりも傾きが大きかった。

情動的共感性、自己愛傾向と自尊感情との関係

「自己防衛的怒り」と「自尊心」の交互作用が有意 ($\beta = -.164, p < .05$) で、「共感的な反応」に対して「自己防衛的怒り」の関連が「自尊心」高群 ($\beta = .082, p > .37$) は有意ではなかったが、「自尊心」低群 ($\beta = .388, p = .00$) は有意な関連を示した。「自己防衛的怒り」と「自尊心」の交互作用が有意 ($\beta = -.150, p < .05$) で、「被影響性」に対して「自己防衛的怒り」の関連が「自尊心」高群 ($\beta = .202, p < .05$) は有意な関連を示したが、「自尊心」低群 ($\beta = .564, p = .00$) における傾きが大きかった。

考察

看護師に求められる「共感的な反応」や「被影響性」は対人恐怖心が高いと高められ、自尊感情が高いと低くなっていた。これらのことから、自尊感情と交互作用があった「自己防衛的怒り」は、「共感的な反応」と「被影響性」を低める要因と考えられる。